

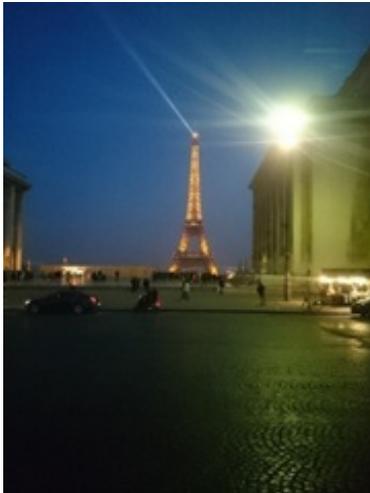


**近未来家族旅行  
(下卷)  
南海部 觉悟**

ドイツ南部バイエルン地方、ミュンヘン近くの高原上空である。

蒼々となだらかな草原が広がっている。

昨日は、終日ノイシュバンシュタイン城周辺を廻った、これからベネチアを目指してアルプスに分け入る予定だ。



無念のイギリスから、ドーバー海峡を渡り、モンサンミシェル・パリ・ベルサイユ・ストラスブール・ハイデルベルク・ローテンプルグと、お決まりのコースを観光してきた。

貨幣経済崩壊後、世界中の観光地は一様に荒廃したが、今日ではボランティアが立派に運営している。

一定期間ボランティア活動を続けた団体に、観光施設本体が無償譲渡される制度が後押しした。

土産物屋の賑わいも、過日と変わらない。

通貨なしでどうやって土産を買うのか？ダウンロードクーポンとピュ

アクーポンが通貨の代わりをしている。

3Dプリンターを使った様々な製造プログラムの、特に優秀でダウンロード回数が多いものは、ネット上の或るサイトに自動的にアップロードされて集められる。

プログラムを作成した個人に対して、ダウンロードクーポンが電子コードで発行され、発行されたクーポンを使って同じサイトから、個人の必要な他のプログラムをダウンロード出来る。

つまり、クーポンを介したプログラムデータの物々交換に他ならない。

そのクーポンが通貨として流通し始めた。

ピュアクーポンも同様である、3Dプリンターの素材（マテリアル）はピュアなものほど精製に技術と時間がかかる。

厳重に管理された保管庫に集められた様々なピュアマテリアルは、ピュアクーポンによって自由に取得することが出来る。

クーポンは様々なサービスの決済にも利用される。

妻は、パリのエステサロンで最先端のエステティックメニューを体験した。

ハイランドウイスキー製造プログラムは入手し損なったが、コニャックのそれは、このクーポンでしっかりゲットした。

長男は、パリのパサージュが特に気に入ったようで、山ほどの土産物を買ってこて来た。

パサージュは日本のアーケード街のモデルとも言われているが、そう言えば彼が生まれた頃、既にアーケード街は存在しなかった。

人と人との交流には、どうしても貨幣のような便利な潤滑剤が必要なのもかもしれない、少なくともこの二つのクーポンが流通し始めて以降、社会に活気が出てきた、人々の顔に明るさが戻ってきた。

クーポンが貨幣と決定的に違うのは、それによって実現できる豊かさは、多少の低品質を覚悟すれば、クーポンなしでも充分実現できるってことだ。

通常の品質の製造プログラムやマテリアルは、誰でも無償でいつでも手に入る。

また貨幣金利のように、クーポンそのものが利益を生むこともない。

クーポンが無ければ実現できない世界は、実質何処にも存在しない。

そんなことを、くたくだ考えながら展望室の畳の上でゴロゴロしていると、猫のビワと目が合った。

窓際の日向で、大股広げてくつろいでいる、もう相当な年増なんだろうが、最近益々その風貌にふてぶてしさが加わった、まるで横綱朝青龍だ。

バイカルはといえば、ビワの隣で小さくなっていて、もう完全な召使の風情だ。

情けないったらありゃしない、それでもシベリアの犬か！猫の機嫌とってどうする！意を察したかのようにバイカルの耳がピンと起った。

その時だった！

頭上で鈍い破裂音がしたかと思うと、細かい振動とともにエアーワゴンがバランスを失った、大小の破片が窓外に拡がる。

直ぐに姿勢制御のジェットノズルシステムが作動して機体を落ち着かせる、草原に向かってゆっくりと高度を下げて行った。

着陸後、機外に出て振り返ると、屋根の左右のダクテッドファンブレードが酷く破壊されていた。

「ダイラタンシーバリアだ！センサー取り換えるの忘れてた！」

草原の背後から、音を聞きつけた村人たちが集まってきた。

状況を確認して、その深刻さにエアークゴンの屋根の上で肩を落とした。

ファンブレードの取り換えだけならストックもあるし、持参した3Dプリンターで製造もできる。被害は外周のリングモーターにまで及んでいた。

ファンブレードは、直径2mリング状の同期モーターの内側に取り付いている。

通常のファンと違って、効率の悪い中心軸が存在しない独自の設計で、慣性質量の配置の上でも理想的だ。

トルク応力が集中するモーターシャフトを排除できて、今回のデザインの最大のエポックだと思っていた。

直径2mのリングモーターを一体で製造するためには、大型の精密プリンターが必要だ、ネオジムといったレアメタルも必須となる。

状況は絶望的だった。

足元ではバイリンガルの妻が、村人たちと何やらドイツ語で話している。

“ダイラタンシーバリア！”人々がそう叫んでいる。

ダイラタンシーバリアとは、集会やイベントなどで施行されるセキュリティ措置のことだ、貨幣経済崩壊以前に開発された技術であるが、当時世界中に蔓延していたイスラム過激派による無差別テロを抑え込むのに、絶大な威力を発揮した。

人に聞こえない複数の波形の超音波を、複雑に組み合わせることによって、空気自体にダイラタンシー効果を発生させる。

ある一定以上の速度で飛翔する物体に対して、ダイラタンシーを施した大気は障壁となる。

銃口から発射された弾丸は、空気と衝突してエネルギーを失い飛翔できない、水中で銃を撃つと同じことだ、爆発物も大気に抑え込まれて衝撃効果を発揮できない。

有効な範囲は半径500m程度であるが、貨幣経済崩壊直後の世界的な社会不安から、個人レベルで武器の製造所持が増えたのを受けて、特に人が集まる場所で、今でも施行されている。

悲しいことに、我が家のエアークゴンのファンブレードは、これに衝突して粉碎されたわけだ。

「あなた、この方この村長さん、エアークゴンの中見てもいいかって？」

「どうぞ、お好きに。」

「やっぱりイギリスでセンサー取り替えておくんだった。」

ここで言うセンサーとは、超音波センサーのことである。

これが作動していれば、ダイラタンシーバリアを回避できた。

他の幾つかのセンサーとともに故障して、イギリスで取り替える筈だった。

「どうするのよ、日本に帰れないじゃない……。」

ハッチを開けて、村長を内部に誘った妻が、振り向きざま悲しげにぼやいた。

その通りである。

貨幣経済崩壊後、公共交通機関は世界中どこにも存在しない、自家用車が壊れたとってタクシーで帰れないのである。

だめもと覚悟でエアワゴンから出てきた村長に話しかけようとした、それを制して――。

「日本人だったな、このワゴンの設計・製造プログラムは持ってきてるか？」

「持ってきてます、プロセス総て再現できます！」

「村の作業場のサーバーにアップロードできるか？」

「出来ます！大丈夫です。」

「だったら、直ぐに始めてくれ、一か月作業場を君に開放する、修理が必要だろう？」



その作業場まで4キロ程あるそうだ。

タイヤがあれば地上を移動したいところだが、重量ゼロの乗り物は地上走行はできないから、ジェットノズルシステムを利用する。

作業場について驚いた、どの装置も埃ひとつなく見事に管理されている、保管されたマテリアルもきれいに分類されそつが無い、流石ゲルマンドイツの作業工房――。

ただし、人が使った気配もない、整備はしても物を作った痕跡が無いのだ。

そういえば、集まってきた村人は皆老人だった。

この作業場の情景が、そのままこの村の事情を反映しているようだ。

システムの起動に時間が必要だ、陽が西の稜線に掛かり始めた。

明日は総ての装置の健全性を、一日かけて検証、確認する。

――こうして、我々の一か月に及ぶこの村での滞在が始まった。

北方に傾いた広大な丘陵が、冷涼な大気を湛えて、どこまでも視界が深い。  
湿気に霞む日本のそれとは全く別物の、ヨーロッパの乾いた空気だった。

傾斜した丘に張り付いた作業場の入り口に、村人が集まって列を作っている。  
妻の診察の順番を待っているのだ。

妻は内科医である。

貨幣経済崩壊後、医師の医療行為も事実上ボランティアとなった。

報酬を決済する手段が無くなったから、廃業する病院や診療所が相次いだ。

人々は自分の健康に、以前より遥かに神経を使うことを余儀なくされた。

そして、最低限必要な医療行為がボランティアとして存続し、現在に至っている。

稼働中の3Dプリンターから、出力完了の自動メールが届いて、坂道を作業場を下りていく。

午前中の診察を終えて、妻が作業場に入ってきた。

「みんな健康ね、あの年齢で成人病の兆候がまったくないわ。」

「農作業のお陰かね、どうやら自分たちに必要な食品は自給しているようだ、3Dプリンターで食品を作った形跡がないから。」

「ダイラタンシーバリアの理由が分かったわ。」

「———何だったんだ？」

「今週末が州議会議員の選挙らしいの、あの前日地域の有力候補の演説会があって、バリアを久しぶりに稼働させたんだって。」

「それで、次の朝までスイッチ切忘れて、センサーの故障した我々が突っ込んだってわけか？」

「村としても、スイッチ切忘れた負い目があるから、ここを快く貸してくれたのよね、き  
っと……。」



長男が、大きなバスケットにチーズや野菜を山盛り入れて帰ってきた  
、妻が嬉々満面で受け取る。

「どうしたんだ、それ？」

「———貰ったんだ。」

「誰から？」

「村のヤンキーグループ……。」

「ヤンキーグループ？どういうことだ。」

「村長の孫のベティを、池の岸辺のキャンプ場に誘ったんだ。」

「ナンパしたのか！」

「そんなんじゃないよ、日本語教えてくれって頼まれたんだ、そしたら体の大きな三人組がやっ  
てきて、黄色いのが白人の娘と話をするなって……。」

「それからどうした？」

「肩を掴んで殴り掛かってきたから、投げ飛ばしてやった。」

長男には、亭主の友人がボランティアでやっている合気道道場に通わせている。

入門当日には、合気道のコツが解ったと言って、三日目には当時の師範代を投げ飛ばした。

一か月後、師匠で道場主の我友人を投げ飛ばしたあと、新しい師範代に推挙された。

——友人曰く、「門下生15人が束になって掛かっても、片っ端から投げられて全く歯が立たない、お前の息子は天才を通り越してもう怪物そのものだ。」

だから、素人が殴り掛かっても敵うわけではないのだ。

「何回、投げ飛ばした？」

「三人合わせて30回くらいかなあ、信じられないって顔して逃げて行った。」

「怪我はさせなかったらうな？」

「そんなことは、心得てるよ。」

合気道は護身術である、敵を攻撃する機能は本来持ち合わせない。

然るに長男は、攻撃されるのを待っているだけじゃ面白くないといって、積極的護身術というのを提唱し始めた。

胸ぐら掴まれたり肩を押されて凄まじりしたら、まず相手にしがみ付く、嫌がって振りほどこうとするのを捌いて投げ飛ばすか、寝技に持ち込む。

合気道に寝技はないが、長男の祖母は整体の師範だった、人の体のどこを締めればどうなるか、長い時間を掛けて伝授された経緯がある。

「30分ほどして、このバスケットを持ってまた三人でやって来た。」

「土下座して謝るんだ、悪かった本当に申し訳ない……あんな風に投げられたのは初めての経験だった、地面に叩きつけられても痛さは感じなかった、まるで神に弄ばれているようで心地よかった……って。」

「弟子にして欲しいって、涙流して何度も言うから……。」

「三人を弟子にしたんだな、——どこで教えるんだ？」

「村の体育館、スプリングを敷いたフロアがあるらしい……そこで父さんに頼みがあるんだ、畳を20畳ほど作ってほしい。」

この村に滞在し続ける理由がまた増えた。

ダクトファン補修は順調に進んでいた。

リング状の同期モーター、ファンブレード、可変ピッチシステム、それらを組み込むダクトフレーム・・・それぞれのパーツを別々に3Dプリンターで出力して、治具を使って組み立てるわけだが、重量がゼロだから作業は特に苦にならない。

長男の畳20畳や、村人から頼まれた様々な製品の制作にも時間を取られるが、全体の工程にはさしたる影響を及ぼさないで推移していた。

亭主は、早くこの滞在を切り上げ、家族旅行を続けたい――最終目的地のコロッセオにたどり着きたいと思う。

意に反して二人の家族は、この村の日常に馴染みきっていた。



長男の合気道場は評判を呼び、近隣の村からも若者が集まり、今では門下生が**30名**を上回る。

彼らの間で長男は、既に神のような存在だ。

妻の診療行為の状況も長男のそれと大差ない、州の医療機関から信頼を得て、簡単な手術をこなす様になると、エアークロスの展望室で診察していたのが、村人総出で作業場の休息室を診療所に改装してくれた。

医療装置や備品は、亭主が指揮を執って道場の若者たちを動員して制作した。

村の作業場の、眠っていた設備が全開で稼働し始めた。

停滞した空気に変化が現れ、人々の意識の下に“産業”という言葉が芽吹き始めた。

アルプスから吹き降ろす爽やかな南風が草原を満たす昼下がり、村長が久しぶりに作業場を訪ねてきた。

「どうだい、修理は進んでいるか？」

「あと、一週間ほどですかね・・・お陰様で何とか旅を続けられそうです。」

「礼を言うのはこっちの方だ、息子さんのお陰で村に若者が集まるようになった、奥さんのお陰で子供や老人が安心して暮らせる、村に昔のような活気が出てきた、初めてダウンロードクーポンを使ってビールを買ってみたよ、まるでお金が復活したようだ・・・いくら流通しても格差が生じないのは、理想的な通貨だと思う。」

湯が沸いて、ドリップしたブラックコーヒーの香りが作業場に拡がり、熱いマグカップを啜りながら村長が続ける。

「来週はこの村のオクトーバーフェストだ、どうだい参加してみないか？」

「何をするんですか？」

「村の中央広場に、大きなテントを張って自慢の自家製ビールを持ち寄って、大宴会が三日三晩続く。」

「昔ミュンヘンでやっていたビール祭り？」

「今はビールメーカーが存在しないから、料理も含めてすべて自家製だ、この前の奥さんの手料理——オコノミヤキだったかな、旨かった、そんなのみんなで持ち寄って……。」

「寿司なら、私も握れます、でも食材が……此処にある分子配列プリンターで魚肉も、貝も米も作れますが、本物にはとても及びません。」

学生時代、すし屋のバイトを4年間続けた、卒業後就職先が無いのでそのまま修行を続けた。寿司職人を生業とする決心がついた直後、貨幣経済が崩壊した。

「それなら何とかなる、心配するな。」

「生きのいい魚が大量に必要ですよ、それにジャポニカ米は？」

「大丈夫だ、まかせとけ。」

それだけ言うと、勇んで作業場を出て行った。

村長といえども信用できる話ではない、念のため一般的な“鮭だね”の分子配列プログラム、コシヒカリとすし酢のプログラムをダウンロードしておくことにした。

三日後に村にやって来た大型のエアワゴンの積み荷を見て、腰を抜かすほど驚いた。

生簀である、活魚である、様々な種類の魚介が生き活きと生簀を泳いでいる。

「驚いちゃ困るな、これは日本から入ってきた技術だろ？」

エアワゴンの持ち主が大声でまくしたてた。

「北海沿岸の漁村から、この重い苦心しながら操って持ってきたんだ、世話になった村長の依頼だって言ったって、少しは感謝してくれよ！——ホレ、コシヒカリもひと俵！」



村長の言う通り、祭りは盛大だった。

LEDに照らし出された広大な白いテントの中央に、無数のビールサーバーが並べられ、赤ん坊の胴体ほどもある巨大なジョッキに次々ビールが注がれてゆく。

テーブルの上には、これでもかというほど大量のソーセージやハムが盛り上げられ、ザワークラウトの大皿の隣では、一抱えもあるエダムチーズやゴータチーズの塊が次々切り分けられる。

人だかりが出来ているのは妻のブースだ、串カツとたこ焼きに人気

集中している。

寿司職人の錬度を評価する様々な尺度があるが、基本は一連の所作を汚らしく見せないことだ。

生の魚と、飯粒を素手で握るのである、食する者が不潔に感じれば一切の意味がなくなる。

握る所作に粋のよさを醸し出せば、それだけでも職人として一人前である。

酢飯独特の香りに誘われ、物珍しさもあって、亭主のブースにも次々人が集まってきた。

白い柔道着の一团は長男の弟子たちだ、村長の孫娘を取り囲み、楽しそうにビールを飲んでいる

。  
一番大きなジョッキを空けたのは、長男本人だ！未成年のくせして！  
まあいいか、大目に見るか・・・。  
くれぐれも母親には気づかれないように・・・。

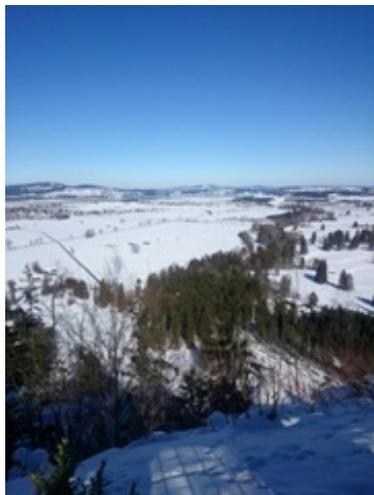
猫のビワは、犬のバイカルと一緒にフランクフルトのテーブルの下で、ソーセージのおこぼれにかぶりついている。

おまえは猫だろ、それも日本のねこだぞ、魚を喰え！

会場の中央でバンドが演奏を始めると、満を持して其処此処でダンスが始まった。  
ハイテンポなロックのビートに、アルプスの田舎の夜が更けてゆく。

今年初めての極北の寒気が、メキシコ湾流の温かい湿気をたっぷり含んで、アルプスの裾野に白いものを運んできた。

南に聳えるアルプスの峰々が、切れ目なく白銀に輝いて、季節は間もなく本格的な冬である。



動力機械部分を覆う屋根カバーが、昨夜の雪を湛えて真っ白だ。そのすぐ下の、2本の目地に挟まれた薄い部位が、ゆっくりと水平に90度回転して、両端にダクトドファンを備えた紡錘形の翼（揚力を期待する翼ではないが、機体回転時の安定翼として機能する）となった。

各システムスタンバイのアイコンがモニターに表示され、エアーワゴンの出発準備は完了した。

雪晴れの作業場前広場には、朝早くから多くの村人が集まっていた。

人々の最前列でひととき目立つ白い柔道着の一団は、長男の弟子た

ちだ。

「先生！先生！」と日本語で叫びながら、中には目に涙を滲ませた若者もいる。

ひととき体の大きな少年が頬をこすりながら長男にハグしてきた。

ひと月前、長男に投げ飛ばされたかつてのヤンキー三人組のリーダーで、今や道場の師範代だ。

花束を渡す村長の孫娘の頬も、あかく腫れていた。

老人たちに囲まれているのは、内科医の我女房殿である。

こちらは、村人手製の衣類や、作物、チーズにハム、ビールの入った大きなバッグを幾つも渡されている。

おいおい！そんなに積んでエアーワゴンが離陸できなかつたらどうするんだ？

犬のバイカルは積もった雪に大喜びだが、猫のビワは雪が降り始めた昨日から、展望室の炬燵に籠って出てこない、顔だけ出して窓の外ではしゃぐバイカルを、羨ましそうに眺めている。

回転し始めたダクトドファンの音に促され、家族全員がワゴンに乗り込むと、外部スピーカーで村人たちに最後の挨拶をして、フェザリング状態のファンにピッチを与えた。

雪が舞い上がり、エアーワゴンが一か月ぶりに離陸する。

真っ白になった足元から無数の声が聞こえてきた、「また、故障したら必ずここに帰ってこいよ！」「他の土地で修理するな！」「また稽古をつけに来てください！先生！」「日本に帰ったら必ず連絡してください！」「ビール送るから！ハムもチーズも！」「先生！

先生！」・・・。

雪煙が晴れて見下ろすと、何人もの村人が純白の雪原に幾筋もの足跡をつけながら、追いかけてくる、眼下に響く村の教会の鐘の音が、名残惜しさを一層深めた。

「もっとあそこに居たかったね、父さん・・・。」

少年の顔に戻った長男が、ポツリと漏らした。

惜別の哀感がワゴンを満たした。

アルプスの稜線を右手に見ながら、オーストリアとの国境を南東に高度を上げてゆく、山脈を越えればイタリアだ。

旅はこの先ベネチア、フィレンチェ、ピサへと続く、また同じような事態に、同じような地元住人との交流があるかもしれない。

目的地ローマのコロッセオまで、長い長い旅程がまだまだ続く、アルプス上空の真っ青な空のように、家族全員の気持ちも、晴々と纏まりつつあった。



PS (追伸)

――半年後のことである。

我家族3名と2匹は、あの村で再び暮らし始めていた。

村人の協力のもと、作業場の隣の空き地に、チロル風ハーフティンバーの住宅を建て、妻の診療所、長男の道場もまた再開している。

日本の自宅や資産を整理し、弟家族に譲渡して、ここに舞い戻った。

亭主は作業場が仕事場となった、村人の求めに応じ必要なものを制作し、傍らのスシバーで板前として働く――すべてはボランティアだ。

貨幣経済の崩壊は、人々から帰属意識を奪い去った。

生きる術は一から十まで全て自分たちで賄うことが求められ、それがまた技術の進展により可能となった。

国家にも企業にも、自治体、団体、宗教にも、誰も所属する必要がなくなった。

集団の合意が、個人の意思に優先する時代は、今や遠い過去である。

組織のエゴが、人々を凌辱する社会は終わりを告げた。

全てのインフラは、個人を対象として極めてパーソナルなものとなり、巨大システムという言葉が、地上から消滅した。

いま、人々を結びつけるのは、ダウンロードクーポンやピュアクーポンを介したボランティア以外にない。

自身で同じことを実現できるのを前提として、あえて人にボランティアを依頼する。  
あえて頼むのである、人に甘えるのである。  
我家族のレゾンデートルもそこにあった、ここで暮らせば、人に頼られ、人に甘えら  
れる・・・・・・・・・・。

旅の終着は、この村に他ならなかった・・・・・・・・・・。

おわり

以上全てフィクションです。

## 近未来家族旅行（下巻）

<http://p.booklog.jp/book/108648>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108648>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108648>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ